

残酷な春

北海道の春は遅いといいながら、この数日、吹く風の暖かさを感じる頃となりました。

私のオフィスは大通公園の近くにありまして、昼休みなど様子を見に出てみると、雪祭りの時の雪像の残骸も随分と小さくなって、代わりに芝生の緑が生き生きと感じられます。

にもかかわらず、何故か気持ちが浮き立つ感じがしません。それは、どうしても、東日本大震災の被災地のことが頭をよぎるからに他なりません。

被災地の人々にとっては、今年の春は残酷な春となりました。

私自身、このような気持ちで4月を迎えたのは久しぶりです。

今から8年前の2月のことです。息子が急逝したのです。何の前触れもなく突然の別れとなりました。逆縁の悲しさは、言葉で表すことは出来ません。

3月、4月と明るさが増し、日増しに春の装いを色濃くしているのに、当時、私の気持ちの中にはそれを感じるゆとりはありませんでした。

周りが明るく華やけば華やぐほど、自分が遠いところにいる、「何故自分だけが」、とまるで不幸を一人で背負っているような感じがしたものです。

心が傷ついている者にとっては、周りの優しさやいたわりさえも痛みとなってはね返ってくるものです。

今、大震災で家族を亡くされた方など、被害を受けられた皆さんのお気持ちは如何ばかりでしょう。テレビを通して、被災者の方々の明るく振る舞う姿を見ると、かける言葉を失います。

そんな被災地にも、春は訪れています。

やがて桜の花も咲くでしょう。

確かな足取りで、確実に季節は巡ってきます。

次の春が来て、また次の春が来て、それからでしょうか、私にも、ふと自分のところにも春が来たと感じ取ることができるようになりました。時の流れ、季節の重なりが傷を埋めてきてくれたのだと思っています。

ひとの苦しみ悲しみを癒すなどということは、私にはできません。でも、思いを寄せることはできます。

今年の春は、残酷な春になったけれど、きっといつか、今年の春を振り返ることができる日が来ると信じています。

だから、それまでの間、被災地の人々の悲しみや苦しみに思いを寄せていこう。

だから私は、ことしの残酷な春を忘れまい、と思っているのです。

(塾頭 吉田 洋一)